

しあわせ小箱

七色の声に乗せて * 1

人街で命を吹き込まれた身長約2才の粘土人形ゴーレムがパニックを巻き起こすSFホラーだ。

先月16日、東京・新宿の映画館。活動写真弁士の佐々木亜希子さん(46)はスクリーン右そでの机に着き、客席を見渡した。マイクの位置を確認し、手元の台本の扉をめくる。おなかに力を込め、あごを引いた。さあ、今日も始めるぞ。

無声映画 話芸で彩る

「七色の声を持つ弁士」。そう聞くと華麗に思われるかもしれないが、63分間の上映後は「たたくた」。でもお客さんは笑顔だったな。独りこちて我に返る。これ、私の声だったっけ？

活動写真弁士は、サイレント映画の登場人物の声色を使い分けてセリフを発し、時には時代背景まで解説する。音楽も自ら選曲し、生演奏をバックに送り届けることもある。

しあわせ小箱

七色の声に乗せて * 2

に集まる親戚に披露した。「ワーツ」と盛り上がる場の一体感が好きだった。埼玉大学を卒業後、NHK山形放送局

♪風鈴リンリンリンなりました みんなで歌うよ。あの歌が、私の原点。無声映画にセリフやBGMを乗せて客席に届ける活動写真弁士、佐々木亜希子さん(46)は、小学3年の時に作った「佐々木家のテーマソング」を今も口ずさむ。

笑ってほろり すぐ決心

ほろりと泣いた。劇場の一体感は、我が家の「お楽しみ会」みたいだった。弁士になろう。すぐ決心した。昔の同僚は「稼げないよ」と心配してくれたが、はやる心は止められない。♪あきちゃんラララ

でアナウンサーを務め、3年後に埼玉のラジオ局に移ったが、間もなく辞めた。「ニュースを伝える側」ではなく、自分が何かの担い手となり、「ニュースで伝えられる側」を目指したかった。1999年、東京・池袋の映画館で初めて「活弁」を見た衝撃は忘れられない。「キートンの探偵学入門」(1924年)と「隣の母」(31年)の2本立て。何役にもなりきる弁士、澤登翠さんの語りに、笑って笑って、

しあわせ小箱

七色の声に乗せて * 3

映画が「活動写真」だった昭和初期、国内に8000人いた弁士は、今は10人ほどまで減ったとされる。

映像と語りと音楽と。活動写真弁士の仕事は、この「三位一体」を会場で作り上げることといわれる。アナウンサーを辞めて弁士になろうと決心した佐々木亜希子さん(46)は最初、その意味がわからなかった。

映像、語り、音楽…笑顔

理解できた。ちょうどその頃、テープがすり切れて再生できなくなった。そして初仕事。最初は膝が震えたけど、観客はみんな笑顔。三位一体じゃない、お客さんを加えた「四位一体」が大事なんだ。

昔の弁士が残したわずかな資料をめぐって台本作りを始めたが、まず登場人物のセリフが浮かばない。そもそも映画が理解できない。これに解説とBGMも自分で考える？ ムリムリ。憧れの弁士、澤登翠さんからアドバイスをもらった。とにかく、映画を何度も何度も見る。10回見る。20回で登場人物の性格が分かり、セリフが浮かんだ。100回を超えると、監督の思惑も理解できた。ちょうどその頃、テープがすり切れて再生できなくなった。

しあわせ小箱

七色の声に乗せて * 4

ラオケボックス。男性の曲を原曲キーで歌い続け、歌手によって発声方法が全然違うと知った。特に歌い込んだのは、

野太い男性の声がほしい。2001年のデビュー当時、活動写真弁士の佐々木亜希子さん(46)は、自分の声域を広げたいと願っていた。サイレント映画に登場する老若男女になりきってセリフを自在に繰り出す弁士。目いっぱい演技分けしているつもりだったけど、お客さんから「セリフが男か女か分からん」とおしかりを受けた。

寺尾聰の甘い声を

高く澄んだ声は、低くしゃがれていった。よし、声域がぐんと広がった。自信を持てるようになった頃、久しぶりに会った友人から「声変わりした？」。あれ？地声まで変わっちゃったみたい。

「公演に響くから早く治して」といたわってくれる周りを尻目に、実はウキウキしていた。のどを奥からかき出すように「ゴホッ、ゴホッ」。咳き込みすぎてあばら骨にひびが入ったこともあったけど、元アナウンサーのど、元アナウンサーのど、元アナウンサーのど、元アナウンサーのど、元アナウンサーのど。

しあわせ小箱

七色の声に乗せて * 5

映画の世界観をきちんと伝えたい。語りは最も抑えたものの、

古いようでいて、実は新しいかも。サイレント映画の登場人物になりきり、セリフを代弁して観客に届ける活動写真弁士の佐々木亜希子さん(46)は最近、弁士の仕事をそうとらえるようになった。

喜び、悲しみ トーンに込め

登場人物の笑顔に、悲しみに、怒りに観客が共感し、あたかもお客さんが銀幕の中に吸い込まれていくような感じ。そんな理想の場を作るために、また新しい台本を準備しななな。

登場人物の笑顔に、悲しみに、怒りに観客が共感し、あたかもお客さんが銀幕の中に吸い込まれていくような感じ。そんな理想の場を作るために、また新しい台本を準備しななな。



(文・影本菜穂子) (了)